

り面白見へたり、翌日はを尋るに、はこの子をつきたりと申けり、またある夜歌をよみし故書たしとて、筆墨紙を乞ければ、少女與へしに、き、もせぬ手にて歌書ぬ、其歌に、

朝貌の朝は色よく咲なれど夕は盡るものところしれ、是のば、歌の道も知らざるに、字はいろはだによみえずか、る死前に歌などよみ、筆取て書は狸の爲す處也、又繪を書て小女に渡しけり、其繪もついに書たる事もなきに、蝙蝠に朝日を書、其上に讚を書たり、その賛に、

日には身をひそめつ、しむかはほりの世をつ、がなく飛かよふ也、と認て小女に與ふ、皆古狸のなす事なるが、扱又食事は日増に進み、朝晩は八九膳、食後直に芳野團子五六本、直にきんつば三四十、又晝飯七八膳食し、其後もまた、如此大食にて日を送りけれ共、病は聊も快復なく、ば、の部屋の内に、一夜光明輝き、紫雲生じ、金花を降らし、三尊の阿彌陀佛顯れ、ば、を連れて行様子に見ゆれば、小女は驚き走り來り、其次第を告ければ、雲峰の妻早く參りて見れども、ば、は能寐て居たり、靜にして聊何事もなし、小女夢にても見しかと尋れば、少しもまどろみは致し不申とて、色變じて恐入しなり、比は其年の十一月の三日の朝、昨夜の事を案じ、雲峰の妻尋れば、老婦が枕元より古狸尾を出し、靜に出て座中を廻り、細き戸の透間より出去りぬ、老婦は其儘息絶て終りけり、其後小女の夢に入て、古狸は世話になりたる禮を謝し、一つの金のむくの盃をさ、げてくれよと頼むと見へて、夜は明にけり、今に其盃金盃に萩の彫したるあり、全く老婦の引取べき人もなく、かいほうして辱を報る印に與へしなるべし、不思議の事なる故、ありしま、に書つるものならん、

〔倭訓栞

前編十四たぬき

略

中

老たるはよく變妖し人を食、又化して人となる、又よく人語をな

す、阿波の家中は、市中の躍まはる事なりしに、明和年中に、兒女の中に交りて、ある家に至り、酒食をたべ、風流を盡して、歸りがけ狸の化たる者、途中に死たり、衣服編笠の類もとの如くなりしと